かいだん

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かいだん

【Ｎコード】
Ｎ３２３１Ｎ

【作者名】
潤

【あらすじ】
忘れ物をした宮崎悠。
それを学校に取りにいった際に
嘘みたいな体験をする。
そして次の日の朝。
宮崎悠は女へと変わっていた。

忘れ物

俺は宮崎　悠。
「わわわ忘れ物ー♪」
俺は自作の歌を口ずさみながら
明日提出の美術の作品を取りに学校にやってきた。
そう俺は忘れ物をしてたのだ。

学校。
「うぃー夜の学校ってなんか怖ー」
美術室に俺は向かった。
テクテク。
噂では美術室にいく前にある
階段を目をつぶって登ると
１３段になるとかいう噂は聞いたことがある。
本来は１２段だが。
どっちにしても長い…。
なんて思いながら俺は階段を登った。
１０、１１、１２…。
ガクッ。
ん？
いつもより一段多いじゃねぇかよ。
なんつー怖い高校に入学したんだよ。
俺。

そして美術室。
先ほどの階段で少し恐怖を感じた
俺はまた「わわわ忘れ物ー♪」などと口ずさんでいた。

俺の作品はすぐに見つかった。
そりゃ明日提出のものを置いてるのは俺くらいだものな
とか独り言を呟いた。

そして帰ろうとしたそのとき。
謎の女がいた。
白い衣装で…
まるで死人…。
まさか幽霊！？
その人は俺に何か言ってきた。
「……」
しかし俺には聞き取れなかった。

その帰路。
自転車を飛ばしていた。
なんか学校でてからというか
美術室でてからなんか違和感感じる。

とりあえず家に帰れた。
「ふぅ。何事もなくてよかった…」
ん？
俺普段もう少し声低くなかったか？
なんか声が高くなったような気がする。

しかし美術室で見たあれはなんだったんだろう？

そして美術の課題を済ませ、
俺はその日は寝た。

性転換

コケッコッコー。
なんていう音で起きたわけではないが。
いつも通りジリジリジリという目覚ましの音で
目が覚めた。
「唯ー。朝よー起きてるの？」
母が俺の部屋の前で俺を起こそうと
叫んでいる。
「はーい。
ん？
唯？」
俺は冒頭でも言ったが宮崎悠だ。
唯などと女のような名前ではない。
そういえば昨日から声が高いような気がする。
俺はおそるおそる鏡を見た。
…。
絶句だ。
髪の毛は長い。
顔も女の子みたいになっている。
着ていたパジャマも
龍とプリントされた自慢のTシャツではなく、
女の子のような可愛いらしい服になっている。
なんだってんだ。
「唯、もう起きたのね。
お母さん朝ごはん作るから」
「はーい」
「早く降りてくるのよ」
ふぅ…。

とりあえず一人になれた。
母は俺がもとから女だったかのように
唯と呼んでくる。
そしてこの鏡での姿。
背も少し縮んでないか？

とりあえず学校休むか…。
こんな姿誰にも見せれんしな…。

確認

その日の朝食。
俺の好物の卵サンドだ。
これがやはりウマい。
なんてことよりもまずは
母に確認しなくては…。
俺はこの家の長男のはず…。
「ねぇーお母さん。
　私の名前ってゆ…い…なの？」
どーいうことだ？
俺が男らしく
「おい、おかん。
　俺の名前は悠だよな？」
と聞いたはずなのに
なぜか自然と女の子口調になる。
「何言ってんのよ。
　あんたはうちの次女の唯に決まってるんじゃない」
「ありがと…」
長女の姉はすでに学校へ向かっている。

むぅ…。
親が我が子の性別間違えるなんて…。
どういうことだ？
よし、次は父か。
でも父は仕事で忙しいから後だな。
ということは姉だ。
「唯ーちゃっちゃと学校行きなさいー」
「お母さん、今日休んじゃダメ？」

「なんでよ？
風邪でもひいたの？」
「そういうわけじゃないけど…」
「じゃ行きなさい」
「はーい」

こうなったら学校で俺の性別を確認してやる。

出席簿

学校へ登校した。
もちろん男子の制服と言いたかったが
なぜかうちにある学校の制服は
女子のものへと変わっていた。
むぅ…。
俺はコスプレ気分で登校するのか…。

まず何より行くのは美術室である。
すべてはここから始まったような気がする。
しかし階段が１２段で昨日の夜よりも
一段少なかった。
「嘘だろ…」
「おー宮崎君」
俺を男扱いする人がいた！
振り向くと美術の男性教師がいた。
こいつは男女問わず君づけするのだ。
「キミ何が嘘なんだい？」
「いえ、昨日夜遅くに忘れ物取りに
ここきたときは階段１３段だったのに
今は１２段で…。
他にもいろいろ嘘みたいなことが起こってるんです」
「またその噂か」
「それは嘘だ。
気にしないほうがいい」

そしてクラス。

「おはよー」
いつも俺はクラスに2番目くらいについている。
1番目は宮崎　麦という女子である。
「おはよー唯ちゃん」
「んだー私はゆ…い…じゃない」
「唯ちゃんじゃない？」
「俺は宮崎悠だ」
初めて言えた、俺の本名を。
「誰？」
そして人も集まってきた。
みんな口をそろえて
宮崎悠なんて知らないという…。

担任が来た。
頼みの綱はこいつが持ってる出席簿だ。
タッタッタッタ。
「先生！」
「何？」
「出席簿みしてください」
「なんでだ？」
「俺の名前だけみしてください」
「はい」
そういい出席簿を受け取った。
宮崎　麦
宮崎　唯
っておい。
嘘だろ？
出席簿までその名前なんて…。
「もういい？」
先生が尋ねて来た。

「先生、俺は男だーーーーーーーーーーーー
唯なんかじゃねぇーーーーーーーーーーーー
悠だーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
つい叫んだ。

1学期終了

ついに男に戻れず
女の姿のまま1学期終了。

夏休み…。
女子の姿で初の。
何すりゃいいんだ？
浴衣着て夏祭りでキャッキャッてすんのか？
俺ー。

そしてそーいえば美術の最後の授業で
携帯いじってるのばれて没収されたのを思い出した。
というよりもあれは。
俺が元に戻る手がかりでもあったのに…。
うん十万以上としそうだが性転換手術について
調べていたのだ。

ということで学校に電話した。
「美術の古谷先生いますか？」
「いらっしゃるよ、今代わるね」
ターララララー。
保留の音が聞えてきた。
「はい、古谷です」
「あの宮崎です」
「どっちの？」
しまった、うちの学校には麦さんもいたのだ。

「悠のほうです」
それでも俺は本名を名乗った。
「宮崎悠？」
「じゃ、唯でわかりますか？」
「宮崎唯君か。
あーゴメン。
携帯返してなかったね」
「そーですよー。
先生ー。
早く返してください」
「じゃ、今から来れる？」
今は午後5時だ。
今からだと1時間かかるから6時になる。
「6時くらいになっても大丈夫ですか？」
「あぁ、いいよ」

戻った

学校。
美術室。
「はい、携帯。
いやーキミの言うとおりだったよ」
「何がです？」
「階段１３段だったよ」
「あ、そういえばそうだった」

するとあら不思議。
髪の毛が勝手にばっさり切れた。
勝手にだ。
そして声も低く戻った。
背も少しだけといっても
元の身長に戻った。
それを見ていた古谷先生が
わなわな震えていた。
「どうしたんです？」
いつも通りの俺の声だ。
「キミの後ろに幽霊がーーー」
？
後ろ振り向いたが何もいなかった。

２学期の美術の時間。
古谷先生が女性に変わっていた。

あの階段…。

１３段だと気付けば
性転換するのか？
やな階段だ。
それとも俺が見たあの白い人と
先生が幽霊と叫んだもののせいで
性転換してたのか？
まーとりあえず俺は元に戻れた。
めでたし、めでたし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3231n/

かいだん

2010年10月10日21時42分発行